

第168回くらしの植物苑観察会 2013年3月23日(土)

春を告げる華花 -祝いと祈りの草木たち-

辻 誠一郎(東京大学大学院新領域創成科学研究科)

今回の題目「春を告げる華花」は、実は2011年3月26日(土)に開催予定だった第144回の観察会の題目と同じですが、東日本大震災がもたらした社会の混乱によって、お祈りをするにはできても、お祝いをするにはできなくなり、開催が見送られました。あれから2年が経ちました。こころ、そしてこころのつながりがとても大切なことを改めて思い知った2年でした。今回の観察会では、春を告げる華花として、梅、桃、桜を取上げて、それらに託されたこころについて考えてみたいと思います。

梅(うめ)、桃(もも)、桜(さくら)

人は、植物たちの開花・葉出・結実にいろいろな思いを託してきました。それがこころの一部となって、大きなこころの世界を作り上げてきました。あざやか色の花、芳香をはなつ花、開花を見ること、芳香を感じることで、それらは人を元気にしたり、勢いを与えたり、恋愛をつのらせたり、心身にいろいろな動きを起こさせてくれます。もちろん、お腹を満たしてくれたり、のどを潤してくれたり、生活の資源としてもたいせつなことは言うまでもありませんが、そうしたことも併せて、わたしたちのこころの世界を作り上げてきたのです。

春を告げる代表的な植物、梅、桃、桜、これらは古くからわたしたちの生活に深くかかわってきました。植物学では、かつてはどれも「サクラ属」というグループに含められていましたが、いまではそれぞれ異なる属に含められています。梅は「アンズ属」、桃は「モモ属」、桜は「サクラ属」というように、「サクラ属」にはいわゆるサクランボという果実をつけるものだけが含められることになったのです。ここで私は、含められると言いましたが、植物の分類というのはあくまで人の行為ですから、研究が進んでいけばまた変えられる可能性があるのです。いま、植物学でふつうな属名や含め方をここでは用いることにしましょう。ちなみに、かつての「サクラ属」の植物たちは、上の三つの属以外では、李(すもも)の仲間が「スモモ属」、上溝桜(うわみずざくら)や犬桜の仲間が「ウワミズザクラ属」、博打の木(ばくちのき)や隣木(りんぼく)の仲間が「バクチノキ属」に含められています。つまり、かつての「サクラ属」は、「スモモ属」「モモ属」「アンズ属」「ウワミズザクラ属」「バクチノキ属」そして桜仲間だけからなる「サクラ属」の六つの属に分けられたのです。これから後では、いまの新しい「サクラ属」で話をすすめていきましょう。

「サクラ属」「スモモ属」「モモ属」「アンズ属」の四つの属は、花も果実(種子)もともに生活にかかわってきたと言えるでしょう。「サクラ属」はサクランボという果実をつける

西洋実桜（せいようみざくら）だけが食用となっていますが、鳥たちは他の桜の仲間をふつうに食用にしています。「モモ属」では果実だけでなく種子も食用にしているものがあります。アーモンドがそれです。果実として売られている桃は、甘い果汁がいっぱいの中果皮という部分を食べますが、アーモンドは中果皮がほとんどなく、その内側の内果皮（ふつうは堅い殻になっていて核と呼ぶ）の中に入っている仁を食べます。仁は種子のことです。落花生（ピーナッツ）も渋皮（種皮）で包まれた種子を食べているので、比較してみてください。「アンズ属」には杏と梅が含まれますが、杏はよく知られるように杏仁を薬用にしたりします。中国東北部では、杏仁の真っ白なジュースが作られていて、きつい中国酒で乾杯した後はこのジュースが悪酔いしない特効薬になっています。梅の果実は桃と違って酸っぱいので、砂糖で煮たり、塩漬けにして食べるのがふつうです。

梅は1月から2月、桃は3月、桜は3月から4月がおおむね開花期と言えるでしょう。少しずつ開花期は異なりますが、寒い冬から温かい春へと移り変わる時期であることに変わりはありません。三つとも、花の少ない冬からたくさんの花に溢れる春への移り変わりを象徴する花木です。日本に記録のある古代以降では、これらは象徴的な花木として親しまれてきました。

これらのうち梅と桃は、本来日本には無かった花木で、中国から直接か朝鮮半島を経て日本にもたらされたものです。中国では梅と桃は花を楽しみ、花にいろいろな思いを託す重要な花木でしたが、日本にもたらされたころ、梅は花が尊ばれ、桃は果実（種子）が尊ばれたようです。その違いはおそらく、日本にもたらされた時期と生活へのかかわりの違いであったように思います。梅は古代律令国家ができたころに盛んに日本にもたらされました。中国では唐の時代です。唐の花文化が日本に直接もたらされたのでしょうか。桃はといえば、弥生時代に稲作農耕とともに日本にもたらされました。どちらもその後、脈々と新しいものが日本にもたらされ、新しい品種も作られていきました。弥生時代から古代においては、梅と桃は明らかに生活と深いかかわりをもった花木と言ってもいいでしょう。中国ではこれらは女性の恋心を表し、また、邪気を追い払うものでもありました。日本ではどのように変っていったのでしょうか。

もう一つの桜は、海をわたってきた植物ではありません。日本の山野にふつうに生育していたものです。その桜は、日本では五つの群に分けられていて、これまでに9種が知られています。とくに山桜（やまざくら）、大山桜（おおやまざくら）など4種からなるヤマザクラ群は、桜の代表格と言えるでしょう。面白いことに中世以降、日本では梅や桃を圧倒して、桜は日本の花に返り咲きました。それは一体なぜなのでしょう。

梅、桃、桜、これらがわたしたちのところにどのように映し出されてきたのか、くらしの植物苑を散策しながら考えてみることにしましょう。

.....

次回予告 第169回くらしの植物苑観察会 2013年4月27日（土）
 「武士が育てた桜草」 茂田井 宏（野田さくらそう会世話人代表）
 13:30~15:30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要